

## 自校史と大学博物館

大学における博物館は、資料収集・保存、調査研究、展示、教育・文化の普及といった活動を一体的に行う施設であり、実物資料を通じて人々の学習活動を支援する施設としても、重要な役割を担っている。

近年、多くの大学でそれぞれの歴史が顧みられ、年史という形にまとめられている。長年かけた編纂作業が一段落し、その過程で明らかになった各大学の歴史や個性を日本の近代化の流れの中に捉えて学問的にアプローチしようとする動きがみられ、「大学の歴史を学ぶ（自校史）」授業を行っている大学も存在する。そうした自校史に関する資料を収集し、建学の精神や沿革について記録保存する部局を持つ私立大学は多数あるが、それらの資料を大学博物館のような施設に展示し、自校史だけでなく、地域の歴史や特色ある研究資料と共に展示し、地域住民にも公開する大学が増えてきている。このような施設は、大学の魅力を発信するだけでなく、社会貢献の一環としても注目されている。

こうした状況を踏まえ、本特集では、各大学における博物館などの施設の概要やコンセプト、運営体制や活用方法などを紹介いただき、これからの各大学における博物館など、大学施設のあり方を考える機会としたい。

140年の歩みを体感する空間——立教学院展示館の試み

豊田 雅幸

●立教学院展示館学術コーディネーター

学院資料・村岡花子文庫展示コーナーと自校史の展開

——「小規模」「後発」を乗り越えて——

松本 郁子

●東洋英和女学院史料室

大学史を基軸に研究、教育と公開事業

——日中を懸けた東亜同文書院から愛知大学へ——

田辺 勝巳

●愛知大学豊橋研究支援課長

日本文化の研究・教育・発信拠点としての博物館

渡邊 卓

●國學院大學研究開発推進機構助教

過去・現在・未来をつなぐミュージアム——早稲田大学歴史館について——

尾崎 健夫

●早稲田大学文化推進部文化企画課

自校史は大学博物館のミッションか

橋爪 節也

●大阪大学社会学共創本部・総合学術博物館教授

## 140年の歩みを体感する空間——立教学院展示館の試み

豊田 雅幸 ● 立教学院展示館学術コーディネーター

## はじめに 「自校史」展示の広がり

近年、自らの歩みである「自校史」を展示する大学が増えている。こうした動きの背景には、50年や100年といった大きな節目を迎えた大学が増え、周年史の編纂や、編纂に当たって収集した資料や情報を扱う、いわゆる「大学アーカイヴズ」の設置といった動きが指摘できる。

特に国立大学の場合、情報公開法や公文書管理法の制定もあり、国立公文書館に類する機能を有する文書館を持つ大学は、12を数えるまでになった。他方、私立大学の場合、公文書管理法とは無縁ながら、「建学の精神」の構築・再確認、入試・広報の必要性などから、大学アーカイヴズに類するセクションを置く大学も多い。

「自校史」の展示は、これら大学アーカイヴズに蓄積された資料と情報を公開し、有効に活用する方法の一つとして、広がりを見せている。

## 1 各大学の「自校史」展示

各大学における「自校史」展示の取り組みは、実に多彩である。施設要件や予算の問題、資料・情報の蓄積の度合い、学内における「自校史」に対する認知度やニーズなど、その規定要因もさまざまである。

そうした中において、比較的早い時期から展示に取り組んでいる大学の中には、独立した建物一棟を使って、充実した常設展や企画展を行っているケースがある。例えば、国立では東北大学（東北大学史料館）、私立では成蹊大学（成蹊学園史料館）、日本女子大学（成瀬記念館）、

同志社大学（ハリス理化学館同志社ギャラリー）などが挙げられる。

また、独立した建物とまではいかないものの、国立大学の文書館や私立大学の大学アーカイヴズが、ある程度スペースを確保して常設展示を行っている例も多い。

国立では京都大学（京都大学文書館）、私立では明治大学（明治大学史資料センター）などが代表的な例であろう。

規模の違いはあるが、「自校史」の展示は、このような大学アーカイヴズによって担われているものが最も多いと考えられる。大学によっては、常設の展示スペースを持たない状況でも、企画展示などを活発に開催しているケースも見られる。例えば、専修大学（総務部大学史資料課）では、創設者の出身地をはじめとする地域との連携による展示を行っている。また、桃山学院大学（桃山学院史料室）も、自治体との継続的な連携による展示を実施している。

一方、大学博物館の中に「自校史」の常設展示を組み込んでいるケースもある。国立では、北海道大学（北海道大学総合博物館）、大阪大学（大阪大学総合学術博物館）、私立では、國學院大学（國學院大學博物館）、帝京

大学（帝京大学総合博物館）、関西学院大学（関西学院大学博物館）などである。これらの場合、「自校史」の展示だけではなく、大学の持つ学術資源や教育研究の取り組みに関する展示が組み合わされており、情報発信の拠点として位置付けられている点の特徴といえよう。また、北海道大学、大阪大学、國學院大学の場合、ほかに大学アーカイヴズセクションが存在するが、帝京大学と関西学院大学の場合は、先に触れた日本女子大学の成瀬記念館と同様に、博物館とアーカイヴズの両方の機能が備えられている。

このように、「自校史」展示は、展示の形態や運営主体、期待される役割などが各大学の事情によって異なるため、一様ではない。そのため、本誌で各大学の取り組みが紹介されることは、大変有意義なことであると考えられる。

なお、立教大学にはアーカイヴズセクションである「立教学院史資料センター」が設置されているが、「自校史」の展示施設である「立教学院展示館」は、経営法人である立教学院の下に設置されており、ここで紹介した事例とは異なる形態をとっている。

## 2 立教学院展示館の特徴

### (1) 立教学院初の展示施設



立教学院展示館の外観

各大学が「自校史」展示を活発に行う中、立教大学では、「立教学院史資料センター」が、2004年以降、毎年、ホームカミングデーに合わせてパネル展示を開催してきた。しかし、常設の展示施設を持たなかったため、新校舎建設に伴うキャンパス内の機能移転のタイミングを捉え、展示施設新設の提言を行った。

この提言に端を発した展示施設の構想は、その後、学校法人立教学院の事業として進められ、2014年5月9日、「立教学院展示館」が立教史上初の展示施設として設置された。立教学院の源流である私塾「立教学校」が築地に開設されてから、140年目のことであった。

### (2) 展示館のコンセプト

展示館設置の事業計画においては、以下の3点が基本方針とされた。

- ① 立教学院の140年にわたる歴史と建学の精神を展示する。
- ② 立教学院各校の自校史教育の場とする。
- ③ 最新の展示技術を用いるなど、一般の来館者にも魅力的な展示とする。

この方針を実現させるにあたり、制作段階においては、学術的な検証に耐えうるしつかりとした立教学院史の展示を実現すること、そして、立教学院に集う小学生から大学生、卒業生や一般の大人までが楽しみながら学べる展示とすることを目標とした。

また、展示館が設置される建物は、1918年に立教大学が築地から池袋へと移転した際に建てられ、90年以上にわたって図書館として学生たちに親しまれた建物であり、1999年には他のレンガ校



立教学院展示館の内観

舎と共に東京都の歴史的建造物に選定されていた。そのため、事業計画においても建物の歴史的な趣を残し、「建築と展示を融合させた新たな空間を創出する」とされた。

このように、前記の目標を新・旧が融合・調和された空間で実現する、これが展示館を創り上げていく上での基本コンセプトとなった。

(3) 空間デザインとデジタルコンテンツ

展示館は、立教学院140年の歴史を固定展示で展開する常設展示スペース(約200平米)と、図書館時代の閲覧ブースを再現しつつフレキシブルな運用を意図した企画展示スペース(約80平米)で構成されている。

事業計画の基本方針で示されたように、展示館に期待される大きな役割は、立教学院の各校が自校史教育を行う「教育的な場」となることであった。そのため、常設展は各校にいつでも利用してもらえるような固定展示とし、小・中・高の1クラス分を受け入れられるような空空間デザインが基本となっている。

また、一般の来館者にも魅力的な展示となるよう、以下のような、タッチパネルによるデジタルコンテンツを配置している。

① 池袋100年へ——池袋キャンパスの移り変わり

② 築地キャンパス

——校地と校舎の変遷

③ 「自由の学府」

という沃地——花開くスポーツと学生文化

④ 情報端末(子供

用×3、大人用×3)

(4) 自校史教育の場として

立教学院各校による授業利用は、基本的に各校の先生方からの提案を受けて実施している。開館から5年目を迎え、授業利用も定着化し、年々増加傾向にある。昨年度の実績をまとめると、「表1」の

学校・学部区分	件数	人数	内 容
立教小学校	2	246	1年生「学院めぐり」、3年生「社会科見学」
立教池袋中学校・高等学校	3	155	英語、選科
立教新座中学校・高等学校	1	25	中学1年生社会科(校外学習)
立教大学(文学部)	1	24	「フィールドワークA2」
立教大学(社会学部)	3	29	「メディア・ジャーナリズム実習基礎」等
立教大学(異文化コミュニケーション学部)	1	7	ゼミ
立教大学(全カリ)	2	215	「文化を生きる:「池袋学」入門」等
立教大学(学芸員課程)	2	87	「校内実習A」「博物館経営論」
立教大学(教職課程)	3	61	「社会・地理歴史科教育法」
立教大学(GLAP)	1	15	
他大学	3	33	首都大学東京、明治大学、淑徳大学
総 計	22	897	

表1 2017年度の教育利用

区分	主催団体	タイトル・内容	会期
2014年度			
主催	立教学院展示館	2014年度ホームカミングデー展 「校友たちの青春—躍動の1950～60年代I」	2014年10月19日(日)～11月29日(土)
共催	詩人尹東柱を記念する立教の会	詩人尹東柱没後70年 遺稿・遺品巡回展示会 「詩人尹東柱27年の生涯」	2015年2月21日(土)～25日(水)
	富安敬二教授退職記念発起人会	富安敬二教授退職記念 「富安敬二作品展—具象から抽象へ、そしてまた回帰としての現在」	2015年3月1日(日)～6日(金)
2015年度			
主催	立教学院展示館	第1回企画展 「戦時下、立教の日々—変わりゆく『自由の学府』の中で」	2015年7月21日(火)～9月4日(金) 2015年10月1日(木)～12月8日(火)
	立教学院展示館 「池袋—自由文化都市プロジェクト」 実行委員会	「池袋—自由文化都市プロジェクト」 巡回展 「戦中・戦後の立教学院—西池袋の変化とともに」	2015年9月14日(月)～22日(火)
2016年度			
主催	立教学院展示館	第2回企画展 「世界に羽ばたくスポーツ文化—『立教』の挑戦」	2016年8月1日(月)～10月16日(日)
	立教学院展示館 立教大学東日本大震災復興支援本部	リバイバル展 陸前高田復興展第5回「『つながる。陸前高田と立教大学』交流展」	2017年3月1日(水)～4月28日(金)
共催	立教大学理学部	「理学部のこころみ—体感する理学展」	2016年10月27日(木)～12月17日(土)
2017年度			
主催	立教学院展示館 立教大学東日本大震災復興支援本部	リバイバル展 陸前高田復興展第5回「『つながる。陸前高田と立教大学』交流展」	2017年3月1日(水)～4月28日(金)
	立教学院展示館	トピックス展「シリーズ立教人 尹東柱」	2017年5月20日(土)～7月22日(土)
	立教学院展示館	トピックス展「図書館時代の面影」	2017年6月6日(火)～7月22日(土)
	立教学院展示館	トピックス展「シリーズ立教人 長嶋茂雄」	2017年6月23日(金)～7月22日(土)
	—	野球部優勝旗展示	2017年7月31日(月)～8月5日(土)
	学校法人立教学院 清泉寮／公益財団法人キープ協会	第3回企画展／ボール・ラッシュ生誕120年企画 「わが人生、日本の青年に捧ぐ—知られざるボール・ラッシュ物語」	2017年8月1日(火) ～2018年2月20日(火)
共催	沖縄キャン・フィリピンキャン・ 日本縦断100km リレー OB・OG 有志の会	「フィールド・エデュケーション—生きた場から学ぶ立教の教育プログラム～大郷博チャプレンの働きを通して～」	2018年3月1日(木)～4月27日(金)
2018年度			
主催	立教大学異文化コミュニケーション学部 立教大学アメリカ研究所 立教大学大学院キリスト教学研究科 立教学院展示館 立教大学図書館	特別展 「米国における日系人収容と日系二世—「小平尚道資料」が語るもの—(仮)」	2018年5月26日(土)～7月21日(土)
	立教学院展示館 香蘭女学校	第4回企画展 香蘭女学校創立130周年記念特別企画展 「咲くはわが身のつとめなり—香蘭女学校130年のあゆみ—」	2018年8月1日(水)～9月28日(金)
	立教学院展示館	池袋キャンパス100年記念 第5回企画展 「歴史の舞台、池袋キャンパス—『池袋の立教』その100年—(仮)」	2018年10月11日(木) ～2019年2月23日(土)予定
	立教学院展示館 立教小学校	立教小学校作品展 「私の好きな立教」	2019年3月予定
共催	沖縄キャン・フィリピンキャン・ 日本縦断100km リレー OB・OG 有志の会	「フィールド・エデュケーション—生きた場から学ぶ立教の教育プログラム～大郷博チャプレンの働きを通して～」	2018年3月1日(木)～4月27日(金)

表2 立教学院展示館の展示会

ようになる。

各校の利用状況を見ると、まず立教小学校では、1年生の生活科「学院めぐり」と3年生の「社会科」（立教についての学習）における利用が定着しており、6学年中2学年による利用が実現している。

立教池袋中学校・高等学校では、中学校の「英語」と「選科」（立教の歴史）における利用が定着しているが、昨年度は、高校生の「英語」の利用があった。

立教新座中学校・高等学校はキャンパスが離れていることもあり、中学校1年生「社会科」（校外学習）における利用のみとなっている。

立教大学では、展開している授業コマ数から見ればさほどの数ではないかもしれないが、利用件数は年々増加している。また、学芸員課程や教職課程、社会学部の「メディア・ジャーナリズム実習基礎」における利用が定着しているのが特徴である。

#### (5) 情報発信の場として

「教育的な場」であることに加え、構想段階から展示館に期待された役割がもう一つあった。それは、立教関係者のみならず、社会一般に対して、立教の歴史と伝統、今日の教育・研究の取り組みなどを「発信できる場」と

なることであった。

これに応えるため、企画展スペースで開催する展示会のコンセプトを、「学術性の高い企画展（教育型）」と「学内外の組織等との共催展（情報発信型）」の二つとした。

「企画展」は、展示館が調査・研究の成果を基に企画・制作する展示であるが、「共催展」は、学内外の資源を基に、展示館のサポートによって展示へとつなげる、他の組織・機関などとのコラボレーション展示である。

開館した2014年度以後の企画展・共催展をまとめると「表2」のようになる。

### おわりに 個別の「自校史」展示を超えて

以上、簡単に立教学院展示館の取り組みを紹介したが、課題はまだまだ山積しており、先行する他大学の取り組みから学ぶことは多い。

特に近年では、他大学や地域などとの共同展示などを行う大学も多い。本学展示館でも、これまでいくつかの機関・団体と共催展を開催してきたが、それによって新たな資料や情報を得ることができ、また、視点の広がりも得られた。今後は、他大学や地域などとの連携にも力を入れていきたいところである。



# 学院資料・村岡花子文庫展示コーナーと自校史の展開

——「小規模」「後発」を乗り越えて——

松本 郁子 ● 東洋英和女学院史料室

このたび自校史と展示をテーマとした特集記事を寄稿するに際し、いささかの躊躇がないでもなかった。各校の事例の中で東洋英和女学院の展示施設は最も小規模であり、大学の自校史教育への取り組みも後発の部類に含まれるだろうからである。しかし、「博物館」ならぬ「展示コーナー」という小さな拠点からのスタートでありながら、ここ数年来、学院史料室では着実な展示活動の拡張や、地域社会との連携の実績を積み上げてきた。そして、そのような学院のアーカイブズ業務の充足に併走するかたちで、大学の自校史教育が始動し、双方の動向が緩やかに収斂していったところに本校の特色がある。大規模校ならずとも、機動的で個性に富んだ展示活動や自校・自校史教育の展開の事例を提示することには、それなりの意義があると思われる。

## 1 東洋英和女学院・東洋英和女学院大学の概要

東洋英和女学院は、キリスト教プロテスタント教会のうちカナダ・メソジスト教会の婦人宣教師によって1884（明治17）年に東京・麻布鳥居坂に創設され、本年度創立134年を迎える。現在、六本木校地に幼稚園、小学部、中高部、大学院、法人事務局を配し、学院史料室は法人事務局に属する。

一方、東洋英和女学院大学は1989（平成元）年に横浜市緑区にキャンパスを置いて開学し、たまプラーザに実習園である大学付属かえで幼稚園を擁している。大学としての歴史は30年あまりであるが、大学の源流に遡れば、現在の保育科の前身ともいえる上田保姆傳習所が



学院資料・村岡花子文庫展示コーナー 村岡花子の書齋を再現

1905（明治38）年に開設され、以後1950（昭和25）年の六本木校地における短期大学の開設が前史にある。カナダ人婦人宣教師たちは女性のための高等教育の機会を常に探り、時代ごとに社会に必要とされる女性の育成に鋭敏に対応してきた。その教育理念の結実が、四年制大学の開学となった。

本校の場合、今回の特集の焦点である展示施設は創立の地である六本木校地に設置され、自校史教育を行う機関は横浜校地にある大学である。そのような隔たりを超えて、展示活動と自校史教育がいかに連動していったのか、以下順を追って紹介したい。

## 2 歴史を見えるかたちに

### ——展示コーナーの設置——

明治創設以来の伝統を有する本校であるが、その認識はある時期まで自足的に教職員や在校生、同窓生の間で共有されているに過ぎなかったといえる。それに対し、「長い歴史を持つ学院であるにもかかわらず、今まで目に見えるかたちで、学院の歴史を感じ取れる場を持っていない」と指摘したのが、資生堂の社長・会長を歴任したのち東洋英和に就任した故池田守男理事長・院長であっ

た。これに応じて、2007年の11月に本部・大学院棟の一階ロビーの一部を改築し、学院の史料展示がスタートする。とはいえ、展示スペースは極めて限られており、壁面3面、大型・小型の展示ケースがそれぞれ2ケースほどしか設置できない規模であった。しかしながら、待合所の一角に展示されたため、来訪者はおのずと学院の歴史に関する資料や年表を目にすることとなり、さらには警備者が常駐している入口に展示コーナーが設置されていたため、外部一般見学者の入場が可能となった。わずかなスペースではあったが、展示機能を備えた場所が地域に開放されたことよって、次に紹介する地域事業との連携の機会が生まれていった。

### 3 区民参画・協働事業「麻布未来写真館」への協力

東洋英和の所在する港区麻布地区の総合支所では、2009（平成21）年に「麻布未来写真館」事業を開始している。この事業は区民や企業、大学などと協働し、麻布地区の昔の写真などを収集するとともに、定点写真を撮影し、麻布のまちの変化を保存していく取り組みである。現在は、港区の基本計画のうち、麻布地区の「多様

な地域資源を生かし、地域のにぎわいを創出できる麻布のまち」を目標とする政策の中に、区民参画と協働を促す地域事業として位置付けられている。

この事業を推進する港区の協働推進課が着目したのが、管内にある本校であり、この地域事業の成果を展示する会場の一つとして本校の展示コーナーが選ばれた。さらに、本校は震災を免れた豊富な写真資料を有していたため、展示写真パネルのコンテンツ作成、歴史情報の提供においてもこの地域事業への協力が可能であった。展示会場を提供したことにより、今まで学院を訪れることがなかった地域住民が新たに学院を訪れる機会も生まれ、地域と学校との交流の促進にもつながった。

### 4 「花子とアン」ブームと展示コーナーの拡張

2014年には、本校の卒業生である村岡花子をモデルとしたNHK連続テレビ小説「花子とアン」の放映により一大ブームが巻き起こる。このブームを機に、村岡家からはおよそ2000冊におよぶ花子の蔵書が学院に寄贈され、それを受けて蔵書の保管とともに社会に広くコレクションを公開し、活用していくために展示コーナーの拡張が行われた。そのような経緯から、学院の歴史を

紹介する学院資料展示コーナーとともに村岡花子文庫展示コーナーが2015年に新たに開設され、展示コーナーは全国の村岡花子ファンも含めた多くの見学者を迎える場所になっていった。

## 5 大学における「村岡花子記念講座」の始動

一方、大学では池田明史学長の発案の下、2016年度に「村岡花子記念講座」開設企画セミナーが開催された。これは、村岡花子への注目が高まる中で、翻訳家や児童文学者にとどまらず、教育者、編集者、放送作家、

社会活動家としても活躍した花子の多彩な側面に着目し、本学の四つの学科（人間科学・保育こども・国際社会・国際コミュニケーション）の学びと連動させる試みであった。村岡家には企画の段階から参加していただき、本学の教授陣・外部講演者は各自の専門分野と花子の業績を関連付けつつ、学術的な講演やシンポジウムを開催し、広く一般に公開した。2016年8月、東洋英和女学院は東京都港区と、「互いに有する資源を活用し、地域社会及び学術研究の発展に寄与するため」の連携・協力に關する基本協定を締結したため、このセミナーは港区との連携事業として開催された。

セミナー会場が展示コーナーと同じ棟の上階であったことから、史料室では講演に関連した展示を企画し、定期刊行物「史料室だより」でセミナーの理念と報告を掲載した特集を組むなど連携体制を強めた。

この企画は2017年度から本格的な「村岡花子記念講座」として常設化され、一般公開事業となった。本年度は短歌界の大御所である佐佐木幸綱氏、三枝昂之氏にご登壇いただき、「花子と短歌」をテーマにご講演いただき。多彩なラインナップに苦心している甲斐あって、地域住民をはじめとする各方面に好評を博している。

港区・東洋英和女学院 連携事業

**2018年度 村岡花子記念講座**  
**『村岡花子没後50年記念』**

2018年は創設50周年である本学院卒業生、村岡花子の没後50年にあたり、この記念の年に、現代の代表する総合大学副学長と三校の代表を招き、花子が残した夢の中の大規模な施設についてお話をうかがい、また、花子が残した夢や、夢から、夢よりの思いや希望を語り合っていきます。

近年の施設では、社会連携においても顕著な実績をした花子の知られざる業績を紹介します。更に花子の社会参加の経緯を振り返り、現在本学人間科学科に創設されている「花子プロジェクト」(集積型施設の子どもに高等教育の機会を創出する)についても取り上げていきます。

第1回 10月19日(土)	<b>短歌・佐佐木信綱門下と「心の花」</b> —花子と白蓮、片山廣子がいた時代—	話し手 佐佐木 幸綱 本人、「心の花」(注)著・編集長 村岡英和女学院専任 講師 村岡 虎雄
第2回 10月27日(土)	<b>村岡花子と短歌</b> —記録短歌の魅力—	講師 三枝 昂之 本人、京中音楽会専任 山梨県立文学部長
第3回 11月17日(土)	<b>村岡花子と東京婦人会館</b> —時代に先がけた女性のための文化施設—	講師 松本 幸子 東洋英和女学院史料室
第4回 12月 8日(土)	<b>人間科学科 花子プロジェクトをはじめて</b> —参観施設の子どもに大学教育を—	話し手 佐々木 智美 本人、村岡英和女学院副学長 人間科学科人間科学科教授 講師 村岡 虎雄

時 間 14時～16時 場 所 東洋英和女学院大学大学院 201 教室  
港区六本木 5-14-40

受 料 無 料 申込期間 各回開催日 2週間前  
(先着順・各回定員 200名)

メール、FAX、電話(いずれも)で生体学習センター(横浜キャンパス)事務局にお申し込みください。  
<ご記入事項> お名前・ご連絡先・参加希望・希望の回(複数回)をご記入ください。  
—お申し込みの受付は、お申し込みの受付時間(お申し込み受付時間)までです。

東洋英和女学院大学生体学習センター  
【お問合せ先】 総務課キャンパス事務局 〒226-0015 神奈川県横浜市中区磯子三軒3号 32  
E-mail: shougakio@toyoin.ac.jp TEL: 045-222-9707 FAX: 045-222-9701

主催：東洋英和女学院大学 共催：港区麻布地区連合支所

2018年度 村岡花子記念講座チラシ

## 6 記念講座を自校史教育に連動

さらに、村岡花子記念講座開設の先には自校史教育の  
カリキュラム化が想定されていた。2016年度のセミ  
ナーで酒井ふみよ（前・史料室担当）が講演した「史料  
室所蔵資料にみる女学生の日常」は、翌年2017年度  
の大学のフレッシュユマンセミナーにおいて新入生に学院  
の歴史を伝える講義に活用され、自校史教育の端緒となっ  
た。2019年度以降の大学の新たなカリキュラムには、い  
よいよ自校史教育の枠が設定され、2021年度からは  
3年生の選択必修科目となる予定である。1年次のフレッ  
シユマンセミナーで学院の歴史の概要を把握したあと、  
就職活動などが始まり社会人への準備期間ともなってい  
く3年次のタイミンングに、本格的な自校史教育の講義が  
行われる。自分が学んでいる大学がどのような建学の精  
神を有し、過去にどのような女性たちが社会に輩出され  
たのか。講義内容としては、近代史におけるミッ  
シヨンスクールの女性教育への貢献、村岡花子や柳原白  
蓮といった卒業生たちの活躍の女性的な分析などが想  
定されている。これらの学びから個々の学生が学校の歴  
史に連なるものとしての自己のアイデンティティを認識



学院史料室所蔵の画像資料をふんだんに活用したフレッシュユマンセミナーでの講義

し、それを他者や社会に向けて明瞭に言語化し、将来のキャリア形成につなげていく一助となることが期待されている。

## 7 今後の課題

### ——激変する教育情勢の中で——

以上述べてきたとおり、本学院における展示活動と大学における自校史教育の動向とは、最初から軌を一にしていたわけではない。しかし、「自校史の可視化」「展示や一般公開講座を通じた地域社会との連携」「村岡花子という人的資源の活用」といった共通の課題、共通の関心事を介することにより、六本木と横浜という離れた校地の径庭を超えた連動が次第に生じていった感がある。本校における今後の課題は、学内各部署の協力や連動を強固にしながら、足元にある歴史的資源・文化資源を地道に掘り起こし、展示活動や自校史教育に活用していくことにあるだろう。

自校史教育にせよ展示活動にせよ、その対象と目的は、学生や地域住民への教育・広報にとどまらない。それは学院の全教職員に自校のアイデンティティの明確な再認識と、社会における学校組織の存在意義の究明を突きつ

ける。そこに明瞭な解を得た組織こそが、大きな時代の転換期を乗り切る新たなミッションを創出していくのだろう。東洋英和の取り組みは小規模であっても、深く、固有の特色を最大限に駆使するものでありたい。

### ●参考ウェブサイト

東洋英和女学院学院報「楓園」51号 特集 学院史料展示  
スタート

<http://www.toyoeiwa.ac.jp/publications/pdf/fuens1.pdf>

東洋英和女学院史料室委員会「史料室だより」No.85「学院

資料・村岡花子文庫展示コーナー」の紹介

<http://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/pdf/shiry085.pdf>

東洋英和女学院史料室委員会「史料室だより」No.88「村岡

花子記念講座」事始

<http://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/pdf/shiry088.pdf>

※東洋英和女学院史料室委員会発行の「史料室だより」は、ウェブサイトで全号ご覧になれます。

# 大学史を基軸に研究、教育と公開事業

——日中を懸けた東亜同文書院から愛知大学へ——

田辺 勝己

●愛知大学豊橋研究支援課長

## 1 大学史を基軸にブランディング

大学在籍中に大学史を理解することは、学生生活の充実に向けた有効なオプシヨンである。大学創設時の環境下において、「どのような背景で大学が創立され、今に至っているか」を理解し、さらに大学史を通して歴史観と先輩方の実績を認識し、視野を広め、人間としての成長につながることも可能にする。偏差値基準による入試結果の入学生は、第一志望ではなく不本意入学の場合が多い。一方、入学した大学は、他大学大学院への進学を望まなければ入学した時点で最終学歴校となる。そこで大学は、1年生の早い時期から大学史に関係する教育を施し、最終学歴校のブランドを学生に理解させ、自信をもたせることが必要である。さらに卒業生には、長い人

生の中で大学史を含め母校を懐かしみ、母校への想いを持ち続けてもらいたい。

そこで本学では、大学史を基軸として、研究面では「東亜同文書院大学記念センター」が中心となつて進める研究を、教育面では大学史に関わる講義などを、公開事業としては「大学記念館」を中心とした取り組みを行っている。さらに、本学を知ってもらおう対象を在学生だけでなく、小・中学生から高校生、卒業生、一般の方々となつて、大学史を中心に公開事業を行い、本学のブランドアップにつながる展開をしている。

## 2 愛知大学の創立と建学の精神

愛知大学は、太平洋戦争終戦の翌年1946（昭和21）年11月15日、6大都市以外では初めて、旧制大学として

愛知県豊橋市に49番目に設立された。愛知大学の建学の精神には、「世界文化と平和への貢献」「国際的教養と視野をもった人材の育成」「地域社会への貢献」が掲げられた。そこには戦争への反省と民主主義の希求、そして、国際社会と地域社会の発展に寄与するグローバルな資質を備えた人材を育てるとの決意が込められている。

戦後の苦難の中、東亜同文書院大学ほか外地校から引き揚げてきた教員が中心となって設立した本学ならではこそ、72年前に掲げられた建学の精神は、グローバル社会が成熟し、地方創生が推奨される現代においても、響き通じるものがある。

愛知大学は現在、名古屋校舎、豊橋校舎、車道校舎の3校舎体制で、名古屋校舎には大学院と法・経済・経営・現代中国・国際コミュニケーション学部を、豊橋校舎には大学院と文・地域政策学部と短大を、車道校舎には法科大学院を設置する文系総合大学である。

### 3 「大学記念館」と東亜同文書院大学記念センター

2018年、創立以来72年目を迎える本学の豊橋校舎は、1946（昭和21）年創立当時、豊橋市の強力な支援

により旧陸軍第15師団（のち教導学校、陸軍予備士官学校）跡地を提供され、発祥の地となった。敷地内にある旧第15師団司令部の庁舎は愛知大学本館となり、1996（平成8）年までの50年間、事務棟として利用された。

1993（平成5）年、愛知大学および本学のルーツ校・東亜同文書院に係る研究施設として東亜同文書院大学記念センター（以下、記念センター）が発足し、愛知大学本館に設置された。その本館は、建物の価値が評価され、1998（平成10）年



大学記念館 全景

に文化庁により登録有形文化財に指定された。これを機に「大学記念館」と改名され、博物館相当施設として、愛知大学とルーツ校・東亜同文書院に係る資料、コレクションを展示し、その業務を記念センターが担っている。

東亜同文書院大学記念センターは、2006年に文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（オープン・リサーチ・センター整備事業／5年間）に「情報公開と東亜同文書院をめぐる総合的研究」として採択され、2012年には文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（研究拠点形成研究／5年間）の「東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築」に採択され、10年に及ぶ助成を受けた。それらを通して、東亜同文書院45年史と愛知大学72年史（2018年時点）の研究を促進するとともに、研究の公開事業として大学記念館を運営している。

大学記念館の建物ルーツは、110年前の1908（明治41）年まで遡る。当初は旧陸軍第15師団司令部からスタートし、次いで陸軍教導学校本部、さらに陸軍予備士官学校本部、そして戦後の愛知大学本館へと変遷してきた。陸軍第15師団では、1909～1925年の17年間に7名の師団長が着任し、1917年に7代目として皇

族である久邇宮殿下が着任された。その翌年、殿下の長女良子女王（なご）が皇太子裕仁親王殿下（のちの昭和天皇）の御妃に決まり、10月には皇太子裕仁親王殿下と良子女王が豊橋を訪問され記念植樹がなされた。それは、豊橋校舎内に健在の姿を留めている。本年は、その記念すべき年から100年目に当たる。

#### 4 大学史に関する講義

本学では「愛知大学の成り立ちを知る」をテーマに、2018年度春学期開講分として共通教育科目「総合科目」の一科目として大学史教育科目を豊橋校舎、名古屋校舎にて開講している。講義は、東亜同文書院大学記念センター研究員である石田卓生非常勤講師による13回と、藤田佳久愛知大学名誉教授による2回の計15回行われた。履修者は、豊橋校舎では希望者311名の中から抽選で選ばれた202名で、名古屋校舎では先着順の190名であった。かつて行われた大学史の授業はオムニバス形式であったが、その時の反省点を取り入れ、専門の研究を1名を主体とする授業に変更した。テキストは、入学時に1年生全員に配付した藤田佳久編『日中に懸ける…東亜同文書院の群像』（中日新聞社、2012）を利用



「総合科目」授業



「基礎演習」(大学記念館、常設展にて)

し、毎回感想文の提出とともに、講義終了時に関連ペー  
ジを学生に伝え、翌週までに復習を課題とした。  
なお、講義内容は、72年間の愛知大学史だけでなく、  
45年間のルーツ校・東亜同文書院とのつながり、さらに  
東亜同文書院の創立にいたるそれ以前のグローバル教育  
の変遷までも含んでいる。

豊橋校舎に所属する文学部、地域政策学部、短期大学  
部の1年生約800名は、「文学部総合研究」「学習法」  
「基礎演習」の1コマを利用し、大学記念館において記念  
センタースタッフによるギャラリートークやビデオ鑑賞

などによる大学史教育を受講している。また、名古屋校  
舎現代中国学部の希望者は、チャーターバスにて豊橋校  
舎を訪問し、大学記念館で大学史教育に参加している。  
また、博物館学芸員課程の実習科目「博物館実習Ⅱ」  
は、大学記念館での授業が組まれている。

## 5 「大学記念館」の常設展

① 大学史展示室「東亜同文書院の45年、愛知大学の70年」  
1901(明治34)年に中国上海に開学した愛知大学  
のルーツ校・東亜同文書院(大学)の45年間と、194  
6(昭和21)年に創立し今日に至る愛知大学の70年間で、  
それぞれの大学史とそのつながりを含めた変遷を軸とし  
て、関係史資料や紹介パネルを多数展示・公開している。  
中でも、東亜同文書院の『学籍簿』『成績簿』、中国側  
に接收されていた書院の華日辞典原稿カード(日中国交  
正常化前の1954年、日中友好協会を通して返還され、  
1968年『中日大辞典』に結実し刊行)、20世紀前半の  
近代中国を記録した貴重な「大調査旅行」の関係報告書、  
および愛知大学設立許可申請書は一見の価値がある。  
では、東亜同文書院がどのような大学であり、愛知大学  
がどのような経緯で創立されたかについて触れてみたい。

愛知大学のルーツ校は、1901（明治34）年に中国上海に誕生した「東亜同文書院」（1939（昭和14）年、大学に昇格）。当時の東アジアは、欧米列強の圧力が清国へ一層強まり、日本も危機感を抱いていた。そのような中、弱体化しつつある清国と提携し、東アジアの安定を図ろうとする動きが、それまでの欧米指向中心であった日本の中に新たに芽生えた。それをまず具体化したのが、荒尾精による日清間の貿易を目指し、貿易実務者を育成しようとする1890（明治23）年に上海に開学した日清貿易研究所であって、卒業生約90名を輩出した。その後、日清戦争が始まり、日本が勝利すると、清国への賠償金請求が唱えられる中、荒尾は反対表明を繰り返し、日清貿易発展のために検討を続けた。一方、近衛家の筆頭となった近衛篤磨は独学の上、欧州留学を経験。2回目の欧州訪問時に欧州列強のアジア戦略に関する情報を入力すると、東アジアの安定化には日清間の教育・文化交流が必要だと痛感する。そこで、1900（明治33）年、近衛は清国の近代化改革を目指す実力者の劉坤一と張之洞の両総督との協議により、南京に「南京同文書院」を開学し、日本人学生24名を派遣し清語・英語・商業・政治などを学ばせた。「南京同文書院」の設立直後、北清事

変によって南京の危機が高まったため、1901（明治34）年、上海へ移転し、高昌廟にキャンパスを設置し、「東亜同文書院」に改名した。書院の経営は財団法人東亜同文会が担い、初代院長には根津一が就任して、荒尾精が意図した日清間の本格的な貿易実務者を育成するビジネススクールとしての歩みを始めた。近衛は発展を図るべく、新たな府県費（給付奨学金）制度による全国から学生募集を行った結果、上海へ留学した卒業生は5000名に上った。カリキュラムは、清語・英語の語学と貿易・商業科目に、中国国内を主なフィールドワーク先とする「大調査旅行」を配置した。「大調査旅行」は、2〜6名が班を組み、希望地域にテーマを持って3カ月以上の徒歩を中心とする大調査であり、中国国内から東南アジアへと広がりを見せ、40年間に延べ700コースに及んだ。東亜同文書院大学は、1945年（昭和20）年の敗戦後、財団法人東亜同文会の解散とともに幕を閉じた。そこで、最後の学長本間喜一の指示により、中国からの帰還時に、教職員・学生が『学籍簿』『成績簿』をリュックサックなどに大切にしまって日本に持ち帰ったのである（5000名に及ぶ全ての『学籍簿』『成績簿』は、今も愛知大学に保管されている）。

上海から帰還した本間喜一は、1946（昭和21）年に、財団法人東亜同文会（書院の経営団体）の会長代理一宮房次郎を訪ね、「東亜同文書院大学に代わるべき新大学の設立を、東亜同文会として考慮していただきたい」と申し入れを行った。数日後、「採用しないことに決定した」との回答を受け取った本間は、「教職員有志が相集って設立しても差支えないか」と問い、一宮氏は「有志で設立されるについては何等差支えない。我々も或る程度の援助を与えるに吝（やぶよか）ではない」と答えた。本間喜一、小岩井淨の両氏は、1946年5月30日に東京・九段下の若宮旅館にて書院の教職員を招集。神谷龍男、木田弥三旺など13名が参加し、新大学設立と9月開校という目標が決議された。大学設置場所は久留米市・別府市・豊橋市・半田市・鎌倉市などが候補となり、「大学将来の発展」を見据えて慎重に検討された。中部日本には法文系大学がなく、構想何如によつては全国的大学として優秀な学生を集めることができるとの見地に立ち、さらに旧軍関係の建物の借入が有望であること、甘藷の大量生産地であり2000〜3000名に及ぶ学生の食糧に不安がないことから、豊橋市を最適地として決定。大学名は、「智を愛するものが集う」との意味を含んだ「愛知大学」に決

まった。愛知大学は1946年11月15日、昭和天皇による裁可を受け、吉田茂内閣総理大臣から旧制大学として許可された。【『愛知大学十年の歩み（1956）』参考】

## ② 荒尾精、近衛家4代、根津一の書展示室

東亜同文書院の前身としての役割を果たした日清貿易研究所設立者の荒尾精、東亜同文書院設立者である初代東亜同文会会長の近衛篤麿（貴族院議長）、書院第5代院長であった近衛文麿（内閣総理大臣）、書院初代院長の根津一、犬養毅（内閣総理大臣）の書を展示している。

## ③ 愛知大学設立者名誉学長本間喜一展示室

愛知大学設立者本間喜一の生涯にわたる関係資料・写真等のコレクションを展示している。

## ④ 山田良政・純三郎兄弟、孫文展示室

近代中国の革命家孫文に協力した東亜同文書院関係者の山田良政・純三郎兄弟に係る関係文献、中でも孫文と関係者の直筆書、掛け軸、孫文の妻・宋慶齡のサイン入り写真など、多数を展示している。東亜同文書院の前身校・南京同文書院の教員であった山田良政は、書院を辞職して孫文が指揮する「惠州蜂起」（1900年）に参戦し戦死したが、弟の純三郎は東亜同文書院の教員を務めたのち、兄の遺志を継いで孫文の秘書役として活躍した。

純三郎の四男である山田順造氏（東亜同文書院出身）は父、伯父と孫文の深い関係を明らかにするため、大量の写真や文献などを集められており、のちに本学に寄贈された。

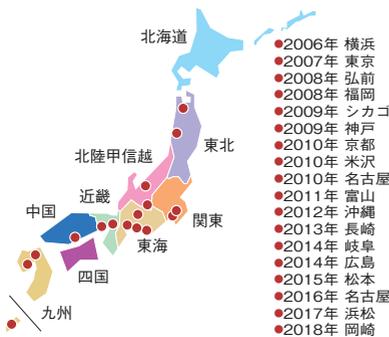
## 6 「大学記念館」の公開事業

① 「東亜同文書院から愛知大学へ」展示会・講演会

2006（平成18）年から毎年、全国各地（米国シカゴを含む）で展示会・講演会を18回開催している。大学記念館に所蔵している史資料コレクションの展示と、東亜同文書院、愛知大学史に関わるパネルや資料などを展示公開。併せて「東亜同文書院45年+愛知大学」をべー



「東亜同文書院から愛知大学へ」  
（岡崎展示会・講演会にて）



オープンキャンパス・豊橋（大学記念館にて）



オープンキャンパス・名古屋（本館20階にて）

スに、開催地との関わりなど研究を公開する講演会を開催している。2018年度は、愛知県岡崎市において6月29日～7月1日に「上海と東亜同文書院大学・愛知大学」と題して開催し、来館者は300名を数えた。なお、18回までの開催地は図のとおりである。

② オープンキャンパスでの「大学記念館」開放（豊橋校舎）と出張展示（名古屋校舎）

本学の特徴の一つとして、東亜同文書院大学から愛知大学への経緯、および愛知大学創設時に掲げられた設立の趣意の内容とその意義などを、高校生に直接伝えている。史資料コレクションやパネルを利用した簡単なギャ

ラリートークを開催するとともに、パネルなどを展示公開している。参加者には、高校生のほか保護者の参加もあり、中には親となった卒業生から声を掛けられることもある。卒業生から次の世代への継承は喜ばしいことである。

③ JR東海さわやかウォーキング、名鉄ハイキング

2015年9月、JR東海さわやかウォーキングの新课程「軍都」と呼ばれた豊橋市の歴史遺産を訪ねてにおいて、2020名の参加者が豊橋校舎を巡り、大学記念館には1234名の来館者があった。2016年10月には、歩いて巡る豊橋の歴史／創立から70年を誇る愛知大学記念館を訪ねてが催され、901名が来館され、2017年2月には、名古屋鉄道ハイキングにて813名が来館された。2018年11月23日には、3回目のJR東海さわやかウォーキング、芸術と食欲の秋 日本画家平松礼二の作品展開催中の愛知大学記念館、……として立ち寄りポイントに決定している。

一般の方々に本学の歴史と本



JR東海さわやかウォーキング (大学記念館前にて)

学ならではのコレクションを見ていただける良い機会として歓迎している。「地方創生」「地元への還元」の一環として、地域と本学がwin×winの関係を構築できる喜びを感じざるを得ない。

④ 名誉博士 平松礼二画伯 特別展示会

卒業生で本学名誉博士である平松礼二画伯(日本画)の特別展示会を、2017年10月12日から創立記念日までの1カ月間、大学記念館2階7部屋にて開催した。平松氏は、1965(昭和40)年に法経学部を卒業され、第1回中日大賞展大賞、第57回中日文化賞他多くの受賞歴があり、フランス、ドイツにて展示会も開催された。



平松礼二画伯特別展示会 (大学記念館2階にて)

展示作品は、日本各地、東海地方、中国、フランス・ジャポニスムのほか、2000年から11年間担当された「文藝春秋」の表紙画など、多彩な大作の中から平松氏自ら厳選された原画作品58点と原画屏風6点であり、来館者は2564名と大盛況の毎日で、大学記念館での催しの中で過去最多となった。

# 日本文化の研究・教育・発信拠点としての博物館

渡邊 卓 ● 國學院大學研究開発推進機構助教

## はじめに

國學院大學博物館は、日本文化の講究に必要な文化財を収集・保存し、学術的な研究成果を一般に公開するとともに、広く学内外の研究教育活動に資することを目的として設置された。その淵源は、1928（昭和3）年創立の考古学陳列室（後の考古学資料室・考古学資料館）と、1963（昭和38）年創立の神道学資料室（後の神道資料展示室・神道資料館）にあり、両組織を統合した学術資料館や伝統文化リサーチセンター資料館の設置を経て、2013（平成25）年に國學院大學博物館が発足した。

平常展は、三つの展示室によって構成されている。校史展示室では校史・学術資産研究センターの所管資料を

交えながら大学の歩みを辿り、考古展示室で考古学から見た日本列島の歴史を通観した上で、神道展示室において神道と日本文化に対する理解を深めることができるようになってきている。また、論文形式に拠らない研究発表である特別展・企画展や、各種の教育普及事業、博物館連携事業などを通して、社会に開かれた大学の窓口としての役割も担っており、年間およそ6万人の来館者があ大学博物館である。

## 1 博物館設置の歴史

当館の設立趣旨は、本学の建学の精神に基づいている。1882（明治15）年に創設された皇典講究所を経営母体として、1890（明治23）年に設立されたのが國學院（後の國學院大學）である。皇典講究所の開校式にお

いて、初代総裁の有栖川宮熾仁親王より賜った告諭にある「學問ノ道ハ本ヲ立ツルヨリ大ナルハ莫シ」が建学の精神の基底をなしている。当館のみならず、本学のさまざまな機関や事業のほとんどが、この建学の精神に則っている。そのため、本学は皇典講究所の創設以来、日本という国の根源を明らかにし、その精神に基づいた研究・教育を継続してきた。

当然、本学の展示活動はその一翼を担ってきたが、博物館の淵源たる考古学陳列室の基本資料は、後に本学教授となる樋口清之が学生時代に寄付した奈良県各地で採集した考古遺物約4000点を中心とし、これに大場磐雄教授の蒐集による縄文土器、宮地直一教授の信仰関係資料などを加えたものである。学生であった樋口は、当時の専務理事に開室を訴え、実業者や父の援助を受けて陳列室を設置したのであった。1932（昭和7）年には「考古学資料室」と改名、博物館法が制定された1951（昭和26）年の翌年には博物館相当施設として認定され、1975（昭和50）に「考古学資料館」と改称した。こういった考古学に関わる展示の歴史や考古学の基礎を築いた先人たちについても、現在の考古展示室にブースを設けて紹介している。

また、神道展示室の前身たる「神道学資料室」は、本学創立80周年記念事業として1963（昭和38）年5月に開室した。皇典講究所から行われてきた祭典・儀礼・有職故実の研究に由来する施設であり、神道系大学としての使命を達するため開設された施設ともいえる。1978（昭和53）年に「神道資料展示室」、1990（平成2）年には「神道資料館」と改称したが、発足以来、神道資料の蒐集に務め、資料の公開のほか、大嘗祭や式年遷宮に関する展示を行ってきた。

## 2 モノと心

展示室開設の一方で、本学は1955（昭和30）年に、日本文化に関する精深な研究を行い、広く世界文化と比較しつつ、その本質と諸相を把握すべく「日本文化研究所」を設立した。そして、2007（平成19）年には「日本文化研究所」を改組転換し、本学における研究教育活動の重点的推進、およびその成果の発信を目的とする機関として「研究開発推進機構」（以下、機構）が発足した。これに伴い、「考古学資料館」と「神道資料館」を統合した「学術資料館」（2013（平成25）年に学術資料センターと改称）が組織化され、それぞれ考古学資料館

部門、神道資料館部門として研究を推進している。このほか、機構は日本文化研究所、研究開発推進センター、校史・学術資産研究センターで構成されている。

2007（平成19）年には、本学の建学の精神に基づく研究教育計画のさらなる展開と、2008（平成20）年3月に竣工する地上5階地下2階建の学術メディアセンター（AMC：Academic Media Center）棟における研究成果の公開を推進促進することを目的に策定した、研究事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」が文部科学省のオープン・リサーチ・センター（ORC）事業に選定された。

この事業は、日本の伝統文化が育んだ知恵と実践の社会的意義を、さまざまな資料（モノ）の背景にある心を抽出することによって明らかにすることを目的としていた。そしてこの事業の推進のために、機構を母体として伝統文化リサーチセンターが設置され、その展示施設として、AMC棟地下1階に1613・99平方メートルの「伝統文化リサーチセンター資料館」を開館した。同資料館は、ORC事業の研究成果を広く公開するための施設であり、事業内の「祭祀遺跡に見るモノと心」「神社祭祀に見るモノと心」「國學院の学術資産に見るモノと心」と

いう3プロジェクトが、それぞれ考古・神道・校史の部門を担っていた。現在の博物館における常設展はORC事業のコンセプトを継承するものであり、これまで本学が蓄積してきた資料と研究成果とを公開している。

2011年度をもってORC事業は終了し、それぞれの展示は学術資料センター、校史・学術資産研究センターが引き継ぐことによって実施体制を構築するとともに、資料館は2013（平成25）年4月1日に國學院大學博物館と改称し、博物館業務を展開する運びとなった。さらに、國學院大學博物館は2015（平成27）年度には機構の一機関として正式に位置付けられたのであった。

現在は、専従の学芸員や事務職員により運営され、専任教員が学術研究面から支援する体制になっている。

國學院大學博物館の前身である伝統文化リサーチセンター資料館は、「考古学資料館」「神道資料館」に校史部門を加えた展示構成であり、長い伝統をもつ日本文化の精神性「心」を「モノ」から明らかにし、研究の社会還元を目的としていたが、この目的は現博物館においても受け継がれている。

### 3 学校史・学問史の展示

伝統文化リサーチセンター資料館から常設の校史展示を担うのが、機構内の校史・学術資産研究センターである。機構発足以前の自校史については、1977（昭和52）年に本学図書館内に新設された國學院大學校史資料室（1984年度から校史資料室）、1992（平成4）年度に設置された広報部校史資料課（2000年度から総務部校史資料課）といった大学事務局において所管されてきたが、2007年度の機構発足に伴い、事務局と密接に連携して自校史を体系的・本格的に研究し、さらにその成果を本学の校史教育に結び付け、学外に発信するための共同利用研究機関として校史・学術資産研究センターが設置されたのである。

自校史展示としては、伝統文化リサーチセンター資料館以来、皇典講究所・國學院大學が編纂・出版した刊行物や、その存在自体が校史ともいえる本学所蔵の各種コレクション（学術資産）に基づき構成されている。その目的は本学における伝統文化発信の実態と、そこで重要な意味を持つ「国学」の学問的手法を用いて、近代以降の「モノ」と「心」に関する人文学の展開を明らかにす

ることにある。いわば、本学の校史・学術資産を通して人文科学系の学問史を展示するものである。

校史・学術資産研究センターは、本学の歴史および本学の有する学術資産の研究を行い、その成果を広く社会に還元することを目的としている。そのため、校史研究の一環として校史資料の収集・保存・管理・閲覧体制の確立を目指している。その所管資料は、校史に関わる文書類だけではなく、本学ゆかりの人物の資料にも及んでいる。本学が輩出した多くの研究者の業績にまつわる資料は、博物館において「近代人文学の形成」として人物と関連するモノとともに展

示し、その偉業を顕彰している。また、本学の母体であった皇典講究所初代総裁ゆかりの有栖川宮家やその祭祀を継承した高松宮家の品々も所蔵しており（一部、大学法人管轄）、本学の歴史と宮家との関わりも常時展示している。とりわけ、有栖川宮家は和歌と書の家と



校史展示室

して知られており、関連資料には工芸品を含む多くの美術品がある。このほか、本学が所蔵する貴重書や各種文庫の資料についても、調査・研究を経て博物館で展示されている。

このように、校史・学術資産研究センターは「校史研究」と「学術資産研究」の二つの柱を立てながら、相互が有機的に結び付いていることに特徴がある。これは、本学の歴史を単に「学校史」としてのみ捉えるのではなく、「国学」や「学問史」として捉えることによって、本学が学問史に果たしてきた役割を示し、自校史の研究・教育を行うためである。自校史展示と関連して、自校史教育に活用できるサブテキストを編纂したり、展示と関連したブックレット『國學院の古典学』などを刊行することで、展示と教育とを連携させている。

#### 4 創立90周年を迎える博物館

考古学陳列室を淵源とする國學院大學博物館は、本年度に創立90周年を迎える。今夏、博物館では開館90周年記念企画展「日本文化の淵源を求めて——考古学陳列室から國學院大學博物館まで——」を開催した（9月9日まで）。この企画展では、樋口博士が専門とした考古学を

中心に、博物館の創設から今日に至る歴史を振り返っている。新収蔵品の初公開など、新たな発展を目指す博物館の取り組みも紹介しており、まさに学校史と関連する学術展示であるとともに、現在の國學院大學博物館の方向性を示す展示となっている。このように國學院大學博物館では、常設展のほかさまざまな展示を行っており、2017年度は、博物館の展示公開として記念展示1回、特別展示1回、企画展5回、特集展示9回、関連展示1回などを開催した。また、展示によってはリーフレット・図録などを作成・頒布している。

また、文化庁の「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に採択され、他の博物館・美術館、文化団体などと連携事業を展開してきた。この試みによって、国内外の多くの方面に本学所蔵資料や研究成果を発信するとともに、新たな視点の創造と学術資産の新たな活用の可能性を探っている。国外に対しては、外国語による情報提供は不可欠であり、展示キャプションなどの多言語化が進められている。今後も英語・中国語など多言語による案内や展示解説を充実させ、海外からの来館者が親しみやすい博物館を目指している。それにより、日本の普遍的・根源的・伝統的な価値観を世界へ発信する拠点

として機能を向上させつつある。その成果もあって、近年、わずかではあるが海外からの来館者も増加しつつあり、外国語で記されたアンケートが寄せられることもある。このような海外からの注目を受けて、外国人を対象として狩衣などの伝統的な装束着けや、雅楽を聴く体験イベントなどを博物館で実施している。参加した外国人からの反響も上々であり、博物館が異文化交流の場として機能している。

そして、以上のような活動や情報を広く発信するためには、現代社会においてSNSの活用は欠くことのできないものとなっている。そのため國學院大學博物館では、公式TwitterやFacebookで情報を発信しており、多くのフォロワーを獲得している。

## おわりに

國學院大學博物館の沿革と自校史展示について概略を述べてきた。博物館の存在そのものが、本学がこれまで培ってきた研究と人物、および継続して蒐集されてきた資料によって成り立っており、いわば1882（明治15）年の開校以来の歴史が博物館によって示されているといえよう。そのため、博物館の展示コンセプトは自校史展

示に始まり、各種学問へと展開していくのである。

本学の学問は日本の伝統文化の追究であり、根幹に「建学の精神」があることはいうまでもない。この展示による研究成果公開は教育活動としても機能している。教養総合科目の「神道科目」「國學院科目」などは、教員の裁量によって博物館見学を授業に取り入れている。それによって、本学の歴史や建学の精神、日本文化を学生に知ってもらい、学問のみならず自校史教育としても位置付けられている。近年は本学学生のみならず、他大学や高校生が教育活動の一環として来館する姿も見られる。また、研究者によるミュージアムトークなど、一般来館者に展示をより深く理解し楽しんでいただけようような各種イベントも展示ごとに開催している。國學院大學博物館は、これら研究成果の教育還元・社会還元を通して、日本文化を多くの方面に発信している。

今後も國學院大學博物館は、建学の精神に基づいた学術研究を進展させ、学術資産（モノ）から日本の「心」を国内外に発信することにより、日本文化の研究・教育・発信拠点としての使命を果たしていきたい。



## 過去・現在・未来をつなぐミュージアム

— 早稲田大学歴史館について —

尾崎 健夫 ● 早稲田大学文化推進部文化企画課

## 1 歴史館の設立

本学は、創立150年となる2032年に向けて「Waseda Vision 150」を策定した。その核心戦略の一つである「早稲田らしさと誇りの醸成をめざして」のもとに、現在、当課ではキャンパスそのもののミュージアム化を推進している。

早稲田キャンパスには、本年、創設90年となる坪内博士記念演劇博物館、同じく20年の會津八一記念博物館に加えて、大隈記念講堂をはじめとする歴史的建造物群や、点在する彫像・記念碑など、数々の文化資源が存在する。キャンパスを訪れ、これと向き合う人々の誰もが、時空を超えてその価値を体感できることは、キャンパスそのものがミュージアムになりつつあると聞いていいのでは

ないだろうか。

早稲田大学歴史館  
の入る建物（1号館）

も、キャンパス整備における歴史継承ゾーンに位置付けられ、1935（昭和10）年竣工の歴史的建造物の一つである。正面入口の円柱は、明治期の正門であった門柱を加工したものであり、戦火に耐え、本学草創期



歴史館正面入口

の息吹を今日に伝える当館の象徴ともなっている。

当館は本年3月20日に開館したが、その展示物や資料を通じて、過去のみならず現在、未来へとつながる思いを込めて、館名の英訳も“History for Tomorrow” Museumである。

## 2 各展示エリアなど

当館は三つの常設展示室（「久遠の理想」エリア、「進取の精神」エリア、「聳ゆる甕」エリア）、および企画展示ルーム、エントリールーム、リサーチルーム、シアタールームによって構成されている。

来館者は、最初のエントリールームで130年余にわたる本学の歴史を年表で概観する。自分自身や社会の歴史を本学の歴史に重ね合わせ、過去の出来事を頭の中で再編したり、時間の経過とその長さを再認識することになるだろう。次に、それぞれのエリアを紹介する。

### (1) 「久遠の理想」エリア

東京専門学校の創設に関わった多くの功労者の生涯や、ゆかりの品々の一端を見ることができ、エリアの中心に足を踏み入れると、「建学の母」とされる小野梓と「早

稲田の四尊」と呼ばれる高田早苗、天野為之、市島謙吉、坪内雄蔵（逍遙）を紹介する資料が展示されている。4人が大隈重信や小野の下に集まって大学の礎を築いた当時、彼らはまだ21〜23歳の若さであった。早稲田大学は、その創立時から、若者の情熱が結集した場だったといえる。そんな場の持つ力が、今もキャンパスに息づいている。

奥には、「建学の父」大隈重信の部屋があり、大隈の政治家としての業績だけでなく、多様な文化・社会事業など、彼の幅広い人間性に触れられるようになっていく。特に日本の首相として初めて録音したレコードの音源と、新しい光

投影技術を組み合わせたデジタルコンテンツは、指向性スピーカーによってす



「久遠の理想」エリア

ぐそばで話しているかのように聞こえる。いかにも大隈らしい演説の迫力に耳を傾けてほしい。

## (2) 「進取の精神」 エリア

大学の現在と未来を分かりやすく伝えるため、教育・学修、学術・研究、グローバル化、学生生活、文化スポーツ、校友組織という六つのテーマに分けて展示している。戦後日本の国際学術交流のきっかけとなったミシガン協

定調印書（複製）や、

故・加藤一郎教授が中心となって開発した世界初の本格的人間型知能ロボット「WABOT-1」（実物）など、世界に先駆けた多彩な活動成果を真近に見ることができ

る。部屋の奥の壁にある巨大スクリーンでは、創立以来の校



「進取の精神」 エリア

地・校舎の歴史的変遷をたどるとともに、首都圏の各キャンパスを、迫力ある空撮映像「135 Years and beyond」によって鳥瞰することができ

る。また、ここでは大学の歴史などに関するクイズも「歴史館検定」として用意され、本学に興味をもつ来館者やOB、OGなどが早稲田を再発見、再確認するきっかけとなっている。

## (3) 「甞ゆる甞」 エリア

これまで本学が輩出してきた多彩な校友を、その活動分野を定期的に入れ替えながら紹介している。本年度は「政治」を取り上げ、本学出身の政治家のプロフィールやゆかりの資料を見ることができ



135 Years and beyond



「嘗ゆる藝」エリア

(4) 企画展示ルーム・その他

常設展示を巡った後の企画展示ルームでは、本学の大学史資料センターなどが所蔵資料を利用して年4回程度の企画展を開催している。また、リサーチルームでは、本学に関する書籍などを手に取ったり、パソコンで各種のデータベースを検索することも可能である。利用者は、そこからさらに次の資料を探し、出会うことになるであ

奥には、常設部分

として首相や衆参両

院議長経験者、芸術

功労者、スポーツ功

労者、三大教旨「学

問の独立」「学問の活

用」「模範国民の造

就」を体現した人物

など、傑出した功績

によって社会に多大

な貢献を果たした校

友や関係者が顕彰さ

れている。

ろう。

### 3 当館の利用と今後の展開

開館以来、本年8月20日現在で3万人以上の入館者があつた。社会人やシニアの方々も多いが、中国をはじめアジアから来訪される方々や、卒業式・入学式や各種イベントに参加される受験生が、保護者と共に来館されるケースも少なくない。

また、「早稲田学」のような当館の展示に関係する授業を持つ本学の教員が学生を連れて見学するケースや、学芸員資格課程夏季集中講座の受講生、附属校・系属校の生徒の見学などもある。

本学を知るきっかけとして、最もアクセスしやすく、土曜日曜でも容易に見学できる歴史館は、さらに多様な切り口で展示内容を更新していく予定である。



## 自校史は大学博物館のミッションか

橋爪 節也

●大阪大学社会学共創本部・総合学術博物館教授

グローバル化や多様化の現代にこそ、大学博物館は、大学の個性を反映した多彩な展開が可能な組織のはずである。しかし、海外の大学博物館が優れたコレクションを所蔵し、地域文化の中心拠点として「わが町の誇り」と呼ばれるケースもあるのに比して、学術審議会学術情報資料分科会の答申も記すように、日本の大学博物館は圧倒的に見劣りがする。規模や予算問題に加え、精神的な問題として日本人が博物館に著しく無理解であることも反映されているだろう。

大学博物館のあり方は、それを開設する大学の見識や基礎研究を重視する姿勢、最高学府たる懐の深さとながつているが、基礎研究よりも実学的な成果を優先させる日本の風潮では、博物館など大学全体にとって付け足しの施設に過ぎず、オープンキャンパスの広告塔や、各

種行事の際に来賓が時間調整をする場所といった程度の期待しかされていない印象もある。開館中のランニングコストを問われ、入館料を取る取らないの議論が予算要求の場で蒸し返されやすいのも、同じ精神風土の産物だろう。

その中で日本人が大学博物館の存在意義を語るとき、多少なりとも寛容になると思われるファクターが、自校史の展示施設としての機能である。在学生は所属する学び舎にプライドが湧き、来客には当校が由緒正しい教育機関の道歩んできたことを見せることができる。同窓会で母校を訪問した卒業生も、開学以来の輝かしい歴史を博物館で一望でき、寄附活動への動機付けとなる。

しかし、大学博物館のミッションとは、本来、自校史を核とした宣伝活動なのだろうか。2015年、日本体



大阪大学総合学術博物館

育図書館協議会オープンセミナー「自校史教育を図書館につなげる」が日本体育大学で開催され、大学博物館の立場から自校史との関係を話させていただいたが、ユニバーシティ・ミュージアム（大学博物館）と自校史の関係は、極めて微妙である。

話の前にまず、MOU (Museum of Osaka University) こと、わが大阪大学総合学術博物館を紹介したい。吹田、豊中、箕面の3地区に分かれたキャンパスのうちの豊中

キャンパスにあり、阪急石橋駅に近い待兼山修学館を展示館として活動している。1995年の学術審議会学術情報資料分科会「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」の報告を受け、2002年に全国で8番目の国立大学総合博物館（省令施設）として発足した。

展示館として活用されている待兼山修学館は、旧大阪帝國大學醫學部附属病院の石橋分院として1931（昭和六）年に竣工した国登録有形文化財である。ステンドグラスや床のタイルにモダニズムが横溢し、ウッドデッキのあるカフェも併設している。

この建物で、原則的に春と秋の2回、特別展や企画展を開催する。その成果は大阪大学総合学術博物館叢書（大阪大学出版会）にまとめ、すでに15冊を刊行した。年間入場者数は平均2万人。恐らく地方の小規模な公立館ぐらゐの数だろう。固定ファンも定着している。

常設展示では、館蔵資料として有名なものが、1964（昭和39）年に理学部建設の工事現場から発掘された約40万年前のマチカネワニ化石である。全身骨格が残され、標本同定の基準となるタイプ標本として貴重なものであり、国登録記念物に登録された。緑色のワニのイメージは、阪大ならびに地元豊中市のマス



博物館ロビーにある  
マチカネワニのレプリカ  
オリジナルの化石は3階に  
展示されている。

コットのゆるキャラとして広がっている。

他にも、1950（昭和25）年に開発された真空管計算機が、国立科学博物館が定める重要科学技術史資料に登録され、同じく第一号磁界型電子顕微鏡も登録されている。さらに、館が立地する待兼山の古代遺跡の発掘品や、初代総長の長岡半太郎、中間子論の湯川秀樹（ノーベル賞受賞の研究は阪大時代のもの）、通信工学の八木秀次、原子核物理学の菊池正士、有機化学研究の眞島利行らの業績も展示されている。本学が精神的源流とする大坂町人の学問所・懷徳堂と適塾の資料展示や、新制大学の発足時に編入された旧制大阪高等学校と浪速高等学校の資料が並ぶコーナーは、学校史に関する部分ということができよう。

このように記述すると、本学でも大学博物館と自校史は密接に連動しているように見える。しかし、話は単純ではなく、大学博物館に携わる立場からは次の疑問を自問自答することになる。——自校史は大学博物館で必ず取り上げるべきテーマなのだろうか、設立における館のミッションとして定められているのだろうか——という疑問である。

京都に「京都・大学ミュージアム連携」があるように、大阪圏にも国公立と私立の大学博物館を結ぶ「かんさい・大学ミュージアムネットワーク」がある。事務局を関西大学博物館におき、京都を包囲する戦国大名の同盟のようになり、大阪、兵庫、奈良、和歌山、滋賀の大学が加盟する。「交流する大学ミュージアムを目指して」大学の扉を開く」をテーマに、文化庁の支援を得て取り組みを行い、大阪大学総合学術博物館はこの連携の中で、大学博物館の存在やあり方を問うシンポジウムを担当してきた。

2013年「大学博物館、街に出る——これでいいのか？大阪のミュージアム——地域文化と学術研究の担い手を目指して——」、2014年「シンポジウム 大学ミュージアムを熱く語る——街と大学の『記憶』をめぐって——」を開催し、後者は大阪芸術大学、大阪商業大学、関西大学などの連携加盟博物館のほか、国立大学博物館の組織である全国大学博物館等協議会が後援して、北海道大学、愛媛大学など国立大学の博物館からもパネリストを招き、それぞれのユニークな活動を紹介した。遠方の館との交流は、大阪地域の館に刺激となった。

2016年には、文化庁の地域核となる美術館・歴史博物館支援事業によって「大学ミュージアムをめぐる



本年春開催の「中村貞夫展」

中村は大阪大学文学部の出身で、小磯良平に学んだ洋画家。美術史研究の成果による展覧会だが、これも自校史の展示だろうか。

シンポジウム みんなのヒストリー みんなのミュージアム」を、グランフロント大阪のナレッジキャピタルで開催。大学以外の市町村の公立館や企業系の博物館美術館からも発表者を招き、学校史を含めて所蔵団体や各館の歴史について意見交換をした。

こうしたシンポジウムの経験から痛感するのが、国立と私立大学の立ち位置が異なることである。私学の場合、学校史そのものが博物館設立の主なミッションとされている気配もあり、議論がかみあわないことが多い。

確かに大阪大学総合学術博物館でも、現実には学校史の展示を行っているし、2012年には学内の別組織として法人文書資料部門と大学史資料部門から成る大阪大学アーカイブズも設置され、自校史の講義が開

講された。

けれども、本学が大学博物館を新設することになった原点は、学術審議会学術情報資料分科会の答申「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」である。それを読み返すと、国立大学の場合、ミッシェンとして学校史を取り扱うことは一言も記されていないのである。

答申の内容を簡単に述べると、現代日本において、大学における学術研究によって収集・生成された学術標本は、施設や要員不足などのため最悪の状況に置かれている。欧米と比較して悲惨な状態であり、わが国の研究と教育の活力を著しく阻害している。

そもそも学術標本は、異なる研究分野からも研究や教育資源として利用されるものであって、国際的評価が確立した欧米の大学が豊富な学術標本を収蔵したユニバーシティ・ミュージアムを設置し、研究はもとより学術情報発信・受信基地となつているように、保存と活用しやすい情報の公開、閲覧調査体制を整備すべきである。さらに欧米の大学博物館は、「社会に開かれた大学」の窓口として研究成果の展示でも活発に機能している。

また、学術資料の研究や教育資源として活用する環境整備はいうまでもなく、欧米に比して日本の実証的な研

究や教育は脆弱であり、一次資料に接触可能な環境の整備が十分ではないために研究・教育の内容が皮相化し、そこから派生する二次三次の研究成果や本質的で独創的な活力にも欠けている。学生や研究者が一次資料と接触する機会を増やす場の設置整備が必要だろう。

さらに、環境問題の研究や先端的研究に典型的であるように、現代の学問は総合化と同時にシステム科学への傾向を強めており、それに柔軟に対応できる一次資料の集積と整備は今後の学問の展開に極めて重要である。

そして答申は、大学博物館の基本的な活動として、  
(一) 収集・整理・保存、(二) 情報提供、(三) 公開・展示、(四) 研究、(五) 教育を挙げる。学生には学術標本に接する機会を設けて実証的な教育を施し、それに基づく学内の研究成果をアウトリーチとして展示によって公開する。しかも、研究成果の展示では論文などによらない新しい形式の公表の方法も研究すべきとしている。

大学全体を社会が要請する「開かれた大学」とし、地域社会に対する知的・文化的情報の発信拠点とするため、創造的、革新的な新知見などの研究成果を地域社会に積極的に発信することが重要なのである。

加えて答申では、博物館の研究者を中心とした大学内

外の研究者に共同研究を求め、大学博物館同士の連携や、定期的に協議会を設置開催すること、協議会への一般の博物館の参加も期待している。国立大学博物館や私学の博物館同士、地域ごとの連携が誕生した背景には、こうした答申の考えが反映されているのである。

答申が期待するミッションを踏まえ、大学博物館が自校史を語ることには、どのような意味があるだろうか。

大阪大学総合学術博物館の場合、基本的に特別展企画展においても、展覧会企画の基礎に調査研究活動を置いてきた。本学の精神的な源流とされる懐徳堂と適塾については、文書類など、それぞれの歴史的な資料を大学が所蔵し、独自の研究機関を有している。

その研究成果の発表として、2013年には、適塾創設175周年記念・緒方洪庵没後150周年記念・第6回特別展「緒方洪庵・適塾と近世大坂の学知」を、2016年春には第20回企画展・重建懐徳堂開学100周年記念「KAITOKUDO 大阪の誇り——懐徳堂の美と学問——」を大学院文学研究科と一般財団法人懐徳堂との共催で開催し、「総合学術博物館叢書13」として、湯浅邦弘著『懐徳堂の至宝 大阪の「美」と「学問」をたどる』を刊行した。同年秋には旧制高校を取り上げ、第9

回特別展「嗚呼黎明は近づけり 友よ我らぞ光よと——よみがえる旧制高校 大高・浪高の記憶と記録——」を大阪大学アーカイブズとの共催で開催している。

懐徳堂も適塾も近世近代史における様々な学問領域において研究されており、本学の先駆的存在にとどまらない。旧制高校のあり方も、近代教育史のみならず近代史や大阪の地域史における大きなテーマであろう。懐徳堂や適塾の一次資料を豊富に保存する大学として、答申が示したミッションの範囲内で、最新研究を元に社会に向けて展覧会を開催したといえる……。

と、まずは以上のように述べると、学術的な姿勢を崩さずに大学博物館を運営しているようで格好はいいのだが、現実には受験生の増加や同窓会の援助を求める動機付けとして学校史があり、それに対応する拠点となることを期待して博物館が設立され、運営されていることも否定できない。国立大学の中でも設立が8番目であるような博物館への関心が薄い風土において、博物館創設に尽力された諸先輩のご努力を思うと頭が下がる。

けれどもまた、大学博物館に在籍する現役の館人としては、過去の研究から最新の成果まで含めて大学内のさ

まざまな研究成果を集め、それぞれについての企画展を開催することが本来の大学博物館の業務であろうと考えられている。本学の場合、総合大学として各部署の意識の違いも大きく、最新研究に関する展覧会は容易には開催できないが、それを丁寧に持続的に開催していくことが、未来に向けた本来の自校史を形成していくことにつながるのではなからうか。

国公立大学と私学では経営上の立ち位置が異なり、総合大学と単科大学でも異なるが、現在の大学における最新研究や研究者の個性、独創的な閃きを博物館で展示したいものである。現在進行中の大学の「顔」が見えないまま、過去の自校史をなぞるのみで博物館の展示が終わるのはもったいない。

日本の大学は雑用が多く、毎日がギョウギョウ詰めで、研究者としても教育者としても窒息しそうな状況だが、広い意味で、学校史の展示と大学博物館のミッションが折り合いをつける方向に進まないといけないのではないか。このことについて国公立大学も私立大学も互いに激励し合いながら、博物館人として協力して進んでいくべきだろう。

㊦